資料面からみた医学図書館と医学教育

—進学, 専門両課程を対象とする単科大学図書館—

大 井 晴*

大 学 紛 争

教育的にみた医学図書館の機能を論ずるのに、昨今澎湃として起こっている大学紛争を想起せずにはいられません。いささか旧聞になるかもしれませんが、昭和44年5月22日付朝日新聞（夕刊）の「仏大学改革の1年」：フォール前文相の言葉はいまでも私の心に残っております。彼は紛争の原因を「最近の科学・技術革命の結果生じた精神の危機が青年層ことに学生に不安を抱かせている。前世紀の産業革命後にも、アナーキズムを中心とするさまざまな過激思想がはやったことがあるが、現在の一部過激学生の行動にはそれを想起させるものがある。19世紀末、人間は機械にみずからをならす必要にせまられたが、今日の人間は新しい情報機械・思考機械に習熟するようにせまられている。」その結果だと指摘しております。そして氏は言葉を續けて日本の大学紛争の解決策としては「現代社会の進歩と歩調を合せた高等教育体系の樹立、大学の民主化と学生参加」の問題をあげておりましたが、日本の各関係機関も氏の意見と同様に現在の教育制度の改革案に努力を傾けているのは、紛争校の域外にある東京女子医科大学¹⁾といえども例外ではありません。

日本の医学制度は、戦前はドイツの制度に範をとっており、戦後はアメリカの占領政策によって、また学制に新しい形態が生じてきたのですが、その何れも日本という文化風土には輸入先の祖国の真髄はさっぱり定着しなかったように思います。これは東洋あるいは日本という国に西欧文化がとり入れられた場合のすべてに言い得ることなのでしょうが、世界中を襲っている科学の急

激な発達によって、いま私達は自然科学系、人文社会科学系を問わず、あるいは高等学校生をも含むヤングパワーの強要によって、大人たちのなしてきた過去の業績の成果は激しく問われているのであります。

当初、この現象を突如として起ってきたものとして呆然としたのは、私たち中年以上の者には強固に形成されてしまった固定観念、あるいは明治100年を経てもなお体内に燻り続けている封建の性格を拭い去ることができなかったからだったのでしょう。若い人たちは時流と年長者たちの古い考え方との食い違いに対して全感覚をもって訴え続けているにも拘らず、それを受けとめようとする年長者側は敗戦以後の価値感の転換にいまだに判断がつかず迷い続けていたようにみえます。いうなれば私たち自身この現象に対し図書館人はどう対処しなければならないのか“精神の危機”に見舞われているかもしれないのです。

紛争の原因に関してはいろいろと論じられていますが、何はともあれ時代の要請に応えるべくまず現状認識の努力を続けるより他に方法はないと思います。その意味で私はこの稿を書くに当り、私の勤務している東京女子医科大学図書館（以下当館と略）の現状分析を中心にして筆を進めて行きたいと思います。

学生 の 参 加

図書館の運営に当り、図書館人は広く利用者の声を取り入れるべく努力するのは当然のことです。ですけれども近年インフォメーション・サイエンスあるいはドクメンテーションの要請に押されて、とかくそれが必要とする研究者に対する奉仕に図書館人の関心が向けられ、大学の二大使命の一つである教育を医学校に勤務

* Sei OI, 東京女子医科大学図書館

する図書館人は多少おろそかにしてきたのではないかと、それは医学校においては特に研究者側に押しきられ勝ちだったせいなのかと、そのような反省をさせられます。教育とかあるいは研究とかは何しろ金のかかるものがあります。中央教育審議会の中間報告のなかにもみられますように「財政的基盤の異なることが、国・公立大学と私立大学との間のさまざまな格差の原因となっている」とありますのは、当大学のような私立大学においても免れ得ない事で、いかに高い理想を掲げても予算という現実面に振り廻されざるを得ません。そこに乏しさを妥当化するためのいろいろな言葉あるいは行為が作られてゆくのは個人でも公人でも変わりのない事だと思えます。しかし教育は個人に比べると同様、否それ以上国家にとりその運命を左右する基本的な先行投資であるとの認識の上に立ち、国家は国公立の区別なく教育対策には万全の努力と援助を願いたいと思うものであります。

前おきが長くなりました。当館の教育面への奉仕の現状を述べてみたいと思います。

元来大学図書館の教育面への奉仕の対象としては教育をうける者即ち学生層と、教育を与える者即ち教育層との二つが考えられますが、実際大学において行なわれている教育の実態、特に教員と学生との関係は学問の性質内容において大きな相違があり、従って教育面における図書館の利用者へのアプローチについても、この点が十分考慮されるべきではないでしょうか。

最初に利用者との接触について述べる事に致します。

当館が利用者との会合をもつようにしたのは1968年が初めてといってもよいのでありますが、実際には、閲覧規則改正を機会に教室図書係との会合を持つことに踏みぎりました。なお当時は学生に対する考慮は省かれておりました。大体において研究者側の意見は学生側のそれに比べて遙かに図書館側に入り易いと思います。というのは大体医科系大学にあっては教育面における主体性を握っているのは学問を授けるべき研究者側にあるからであります。図書館規則の面は勿論、資料の選択に関してもこれまで学生は殆んど受動的立場におかれておりました。

田中久文氏²⁾は論文のなかに、図書館の新築あるいは移転が契機となって資料の分散主義が集中化されてくるというようなことを書いておられます。当館が昨今館内の資料の整備に努力を傾けるようになったのも全く新築移転が契機となったのに他なりません。資料整備状況に対する批判は研究者側、学生側を問わずいっせいに新築

図書館に向けられはじめました。学生とのミーティングもこのような状況のなかではじめて発足したもののなのです。

しかし学生図書委員は、元来学生部の諮問委員会の一つとして成立したものだそうであります。役員交替は、その年の1月となっておりますが、委員は各学年に3名ずつ委員長は専門課程3年生(全学年を通しての5年生)が担当することになっております。このなかに専門課程4年生が加えられていないのは、この学年は臨床医学実習生として事実上医局員と同様の生活に入っているために、下級生と連絡を保つことが困難であることも理由の一つです。

図書館において全学年委員とのミーティングは年2回、教室代表とは年1回と予定しておりますが、別に規定をつくっている現状ではありません。ただ両者の違いは、教室代表者との場合は館長、副館長の出席の他に図書委員の出席はなし、学生との場合は図書委員全員、他に厚生補導課の出席という点にあります。当館の図書委員の構成メンバーは、臨床・3(うち分室1) 基礎・2 進学・1 (ほかに1969年より看護短期大学分室1が加わっております)で被選挙資格は助教授以上となっております。以上の如き構成のため研究者側との会合の場合は教授クラスの出席者の前では兎角発言しにくいこともあるに違いないという理由で委員不在のミーティングとなった次第ではありますが、逆に学生との会合では被教育者、教育者との意志の疏通をはかるために開かれる性質のものでもあるのです。勿論両会合には館員側も全員出席すべく開催時間を考慮します。というのは利用者側と館員との面識を深めるため、また利用者側の質問に即答できるようにスタッフを揃えるという理由もありますが、情報は可能なかぎり間接的にうけるよりも直接的なほうが館員の活動を高めるのだという私たちの理念からでもあります。館員12~3人どまりの小図書館にしてのみなし得ることなのでしょう。

そしてこれは今日までの在職中の経験から得た私の印象なのですが、学生が資料のうちで最も要求しているものは専門図書の複本の要求、教養面では小説および総合雑誌の購入希望のように思います。上記の会合の場合もこの要求は変わりませんでした。しかしこれまで複本が少なかったのは予算の都合でもあり、総合雑誌を購入しなかったのは医科大学としての教育にさほど関係がないことだとして当時は片づけられていたからです。医学の修業年限が現在の専門課程4年でも少ないといわれてい

る今日、医学生はスポーツをする暇も、総合雑誌に眼を通す暇もないくらい勉学にはげまなければならないというのも事実かもしれませんが、現在、専門家の養成には人文社会科学の教養がいかに大切であるかがいわれていますだけに、人体を扱う医師の養成がその例に洩れるということはありません。

加えて当館は進学課程の学生の図書館としての機能も果さなければなりませんので医学専門外の図書の収集も避け得られないものとなっております。学生の図書館の蔵書に向ける批判もこのような事情からいっそう強く一般教養図書の欠乏にむけられているのだと思います。

図書選択制度

資料の収集にあたってはその図書館の所属する地域あるいは機関の実態に添う収集を行なうべきであることは論をまたないことでありますが、何しろ資料の収集ということは経済にふり廻されることであり、最も要求度の高い研究者側にその予算の多くが向けられてしまうといった実情から資料が教室分散制度にならざるを得なくなってしまうといった事情は既に周知の事実だと思いますが、教育を果すべき図書館としての使命からいえば各専門分野の図書がバランスを保って図書館の書架に配架されているといった状態が教育としての第一条件のように思います。これは学生の教育のためばかりでなく、研究者にとっても自分の専門以外の分野のものを参考にするときにその必要性を満たしてくれる場所という意味でも重要なことであります。ある資料が一部、大学の教室内のどこかに所蔵されているから中央図書館に備える必要がないといった性質のものではないのです。文部省の大学設置規程にも図書の集中化という一文は明記してありませんが、教室備付の必要度に予算が応じきれない場合、被教育者という立場上、学生はいつも受身の立場におかれざるを得ないのは前にも申した通りですが、中央図書館はあくまで学生教育の理念に立つ資料構成を行なうべきなのでありましょう。

各医学図書館の図書の選択制度について、第39次日本医学図書館協会総会承合事項「図書の選定委員会の構成メンバーについて」に寄せられた回答をみると、大学図書館合計51館の中、回答を寄せられた館の委員の代表は各学科別ではなく、殆んど基礎、臨床の代表数名からなっていて、当館の図書委員会とその性格を同じくしているように思います。つまり「ただし大綱のみ検討千葉」「審議事項は図書の選定に限らない 横浜」「図書

委員会では専ら経費の枠と選定方針を議す 東函」の如く、主として運営に関する審議会のもののようです。はっきりと選定委員会の性格をもっているのは委員の数が多く、開催頻度が不定期または10回以上あたりのところと思いますが、うち学生委員の参加は東大、神戸で殊に神戸大学図書館医学部分館の「教室図書係集会、学生図書委員会」の図書の選択に公式に学生に発言権を与える制度は私の関心を惹きました。少なくとも学生を加えた図書の選択に関しては東大、神戸両館の経験を加えて論ずる必要があるのではないかと思います。

上記の選定委員会を持たずに「医学の専門図書は日本の出版物は殆んど購入する。洋書はテキストブックは全部購入、特殊モノグラフは図書委員会にはかる。」このような選定規程によって購入している図書館も多いのではないかと思います。これは最も手っとり早い購入方法でもあり、少なくとも和書の選択に関する限り学生の参加は余り必要ないということになるかもしれません。もし過去において学生委員の参加を求めていた図書館が、現在その方法をとっていないとすれば、あるいは日本の出版物の殆んどを購入するというこの方法によるためかもしれませんが、和洋に拘らずある本が改版された場合、その出版物が改版されたという理由だけでは是非購入すべきものかどうかは専門家の判断による決定が最も確実な方法だと思いますし、また和書のみの場合においても、書店から持ちこまれる出版物、あるいはカタログによって広告されている出版物が全部推薦に価するものかどうか館員のみでは決めかねる問題だと思いますので、出版と同時に資料に接し得るという即時性を除けば、やはり選択方法の問題は残されていると思います。

当館の購入制度を申しますと、年1回、年度末に学生のための参考図書と、ほかに図書館としては是非備えておきたい図書の2種類の推薦方式によって各教室に選択を依頼しております。年度末というのは学生参考書を新学期におけるカリキュラムの関係上、大体この時期に決定してしまおうといった事情によるもので、いま一つの種類の図書もついでに同時期に推薦して貰うといった方法です。

「自分が図書を購入するにはどれにすべきか、その選択には図書館に数多くの本があると便利である。」という学生の声は当館の備付図書の少なさに対する批判なのかも知れません。

理想を申せば館内に図書選択室を設け、書店より持ちこまれた見計い図書を、各教室より選出された委員が

——東京経済大学図書館では教員全部その部屋に入って読む権利をもち推薦する資格をもっている——随時やってきて推薦のサインをしていったあとを、図書館側が予算より購入の可否を決定するといった制度のほうがもっと速時性をもつかかもしれませんが、この方法を施行するためには予算の確立と、しかも持込み書店の手数に見合うだけのある程度の購入量を必要とするわけです。

以上は大体医学の専門図書の選択方法として適用される方法と思いますが、進学課程のカリキュラムに基いた図書の選択は、一般教養書といえば広範囲にわたりますので、当館のような教室推薦制度だけではとても遂行しきれないものがあるように思います。

進 学 課 程

医科大学に進学課程が設けられたというのは、大学側では専門課程に進むべき学生の確保、学生側においては再度の入学試験や志望大学の選択に苦しむ不安定をなくするといった実利的な面から考慮されたもののようですが、進学課程本来の使命は「旧制大学での大学教育が狭い専門分野に限られた専門教育であり、広い総合的、全体的な視野をもった人間形成に欠けているという、アメリカの教育使節団の批判と勧告から生まれた⁹⁾」ものであることはご存知の通りであります。この制度はその発令当時からとかくの批判のあった学制のようでしたが、新制高等学校までに通りの一般教養を身につけたものが、更に大学において、特に学年を設けて教養を得させようというのですから、そのための施設、教員の質、量的確保が充分になされた場で教育しなければ、「全面的な人間形成にとって重要なはずの一般教育が、大学教育のなかでつねに冷飯を食わされ、軽視されている⁹⁾」状態に放置され、吸収力の旺盛であるこの時代を不毛に終らせてしまいます。医学・医学教育審議会へ寄せられた全国大学へのアンケートの結果集計⁴⁾のなかにもみられますように「小・中・高校において将来の社会を担うための人間教育（読教育）を完了することが望ましい。それによって学力に対する評価の基準も自ら異なるものとなることが期待される」「高校教育と教養部の重複があり……」のように現在の進学課程のあり方には疑問をもつアンケートが多いように思いました。折角医学という明確な志望をもって入学してきた学生なのですから、医療を通して人生問題、社会問題に深い洞察力をもつ医師を養成するには、進学コースの精神を全学年を通して行なうべく学科編成したほうが、患者の心を通して身体

治療を行なうべき、また地域社会を通して診療、保健衛生指導に当るべき広い視野の医師が養成されるのではないかと。学問によっては集中的に行なうよりも、他の学問と合せて平行的に年月をかけて行なったほうが効果が上る場合もあると思いますが、学制に対する批判は私の如きものの知識をもってしては危険の誘いを免れませんのでこの辺でとどめますが、図書館の資料収集の面からみた進学課程について一寸述べてみたいと思います。

まず第一に一般教養図書の総合的収集ということが問題として浮んできます。現在単科大学では教養課程の講義は相当数の外来講師によって行なわれているのが実情であろうと思われます。教員が専属でないということは学内におけるその教員の地位を弱くしますし、学生との接触の機会も少なく、自然学生に対する責任も軽くしてしまいます。まして来館するなどということもありません。その外来講師によって推薦されたある一部の図書と進学課程の数人の専属教授によって選択された図書のみでは一般教養の体系的な選択は実現され難いのです。そのためには「一般教育の責任ある研究・教育体制を制度的に確立しなくてはなりません。一般教育の担当教員となる専門研究者の定員を増し、一般教育の研究・教育の中核を強化すると同時に、一般教育を担当する教員から選ばれた委員を中心に、一般教育のカリキュラム編成権などをもった全学的な委員会を作る⁹⁾」ことによって一般教養図書の充実した選択制度の基礎がなされるのだと思います。これらもすべて予算に左右される問題ではありますが、現在の進学課程と専門課程の制度的分離、そして専門課程優位の状態では一般教養図書という範囲の広い資料の収集は、それなりに確乎とした選択方針を樹立しなければなし難いでしょう。

ただ、私がこの稿を草す途中にあって、文部省の私立大学に対する援助策が発表されましたが、援助がたとえ教育研究補助あるいは教員の待遇に対するそれであっても、それによって大学の予算の乏しさからくる教養図書の収集の悪条件が氷解してゆかかみえる兆候を喜ばしいことだと思っております。併し私に与えられた課題は図書館資料に対する学生参加についてでありますので、問題を本来のテーマに移します。

非専門的教養図書

現在私たちは時代感覚に反応せずに日常生活を送るわけにはゆきません。読書の面においてもジャーナリズムの影響に犯されずに古典のみに心を傾けて過せるのは恐

らく一部の老人のみではないでしょうか。図書の蔵書構成にも常にこの感覚を適切にとり入れて行くべきであります。また館員は選択洩れの部門に対しても常に神経を張りつめてゆかなければなりません。

新築図書館移転以後、学生の希望した図書のうち、全学年を通じて最も要求の多かったのは美術書、文学書のような一般教養図書に対してであります。図書の選択制度が今後もっと改善されるとしても、図書館側の選択洩れあるいは今日的な要求を入れるべく、学生の声は欠くべからざるものとなっていると思います。

それならば図書委員として今後、学生もその一員に加えるべきかといいますと、図書委員会の議事は学生にとって直接関係のない面も多いので、学習のための貴重な時間を割いて出席するには当らない。そこで、さきに書きました学生のみのお会合または投書、あるいは図書館側の要求によって提出される集計的な回答の結果によって図書館側が態度を決定するといった方法が適切なのではないかと思います。

アンケートに寄せられた学生の希望図書について、その例をあげてみますと

(1)雑誌：ライフ 朝日グラフ スタイルブック 文芸春秋

(2)外国の文芸作品(クロエニン、サルトル、カミュの全集、サンテグジュペリ：星の王子)

(3)医学・医療制度に関係のあるもの(川上 武：日本の医者)

(4)社会問題関係(住井すえ：橋のない川、リースマン：孤独な群集、ナチによって処刑された医学生のレポート：星にきいてごらん)

(5)鑑賞のための美術全集

図書委員会での購入計画と偶然一致したのは、新書版の如き教養書でしたが、過去2年間に年間平均約10万円相当の図書の購入によって、学生のこれまで図書館に対してもっていた不満に応えたといった具合であります。

前にも書きましたが、一般教養図書の選択購入については、当館はいま過渡期の状態に在るに過ぎませんので、学生の教養図書の購入のために計上すべき予算額が、この額を下ることはないとは言えませんが、医学専門書1冊購入額からみれば凡そ1/10、あるいはそれ以下で学生の医学書以外の読書欲に応え得るのですから、大学にとってもさして大きな犠牲でもないわけです。

しかし、われわれ図書館人には書庫の収容能力を気に

する習性があります。これは蔵書というものは多いほど大図書館としての資格があるというような員数主義に起因するのではないかと思います。しかし自然科学系の図書館では図書の生命が歴史的な観点からみる必要のない限り短いものでありますし、書庫スペースの大半は専門雑誌、2次資料によって占められてしまいますので、土地スペースの獲得が困難な事情になってゆく現代では、自然科学、文科系を問わずその時の必要に応じた廃棄図書の選択にわれわれの眼を向ける必要があると思います。そこにはデポジットライブラリー、相互協力の問題が起こってくるでしょうが、大都市における土地スペースなどという単純な問題だけではなく、資料の激増あるいは、情報技術革新による時代的趨勢が世界の図書館界の閉鎖性を今後ますます打破してゆくものと思われます。

参 考 業 務

以上、大体において進学課程の面を問題としてきましたが、結びとして医学専門図書館としての考察を試みたいと思います。

ともかく学生のための資料といえはその殆んどが単行本の利用となっております(大学院生の場合はここでは研究者側とみなし省きます)、当図書館での学生の単行本の館外貸出冊数は研究者の2倍、逆に雑誌は研究者の1/35、しかもこの利用は臨床実習を行なっている専門課程の4年生によって殆んどが占められています。しかし場合によっては雑誌が単行本の代用をし得るということもあり得るのではないかと思います。勿論単行本として出版される場合と、論文の性質が違ふ場合が多いのですが、ある主題を求める利用者に対して、学生といえは単行本といった先入観から離れた探し方にも意を用いる方法もとられるべきでしょう。雑誌特集号あるいは新着誌の主題索引によって組織的なレファレンスサービスを行なうことをわれわれは知っているのですが、カレントアウェアネスサービスには特に医学を専攻した図書館員によるサービスが最もその能力を発揮するものだろうと思いますが、医学校出身者が図書館に勤務しているのはほんの少数例であって、図書館業務としても他と比べてこれは特異の例になっていることに思いを致します。

以上述べてきました単行本の選択制度、また雑誌利用によるサービスにおいても、すべて図書館側から利用者に対して資料を与えるための考察に他なりません。しかし図書館は利用者の手による文献探索の場でもあります。利用者が自らの手で資料探索を行なう場としてのツ

ールの整備またその利用を指導する場としての機能も備えるべきであることは、申すまでもなくこれも今日的課題といえましょう。

医学生に対する指導の一つとして、当館では4月に新入生に対するオリエンテーションを行なっておりますが、これはいわば館内案内程度のものであってツールを使って資料に近づく方法の指導といった種類のものではないのです。医学生に対する文献探索指導については、吉本瑞応氏の論文⁹⁾に敬服しておりますが、当館においても来年より4月の行事として専門課程2年生を対象に指導を行なうべく計画中であります。1クラス100人の学生の指導ですからたとえ能力のある館員がいたとしても、たった1人の労に頼るというわけにはいきません。

当館は文献探索サービスに経験の浅い恨みを拭いきれませんので、現在ツールと件名に慣れるために館員一同が文献探索サービスに当たっておりますが、これはまた館員の医学的知識の勉強のための一つの方法でもあります。文献探索サービスとしてこれが最良の方法であると自負しているわけではありません。定着性の少ない女性の職員によって殆んどが占められてきた当館の、これは過渡期の状態に対する対策の一つだと思っております。

要するに過去の単なる書庫としてのみの機能を脱却すべく図書館サービスについて多角的な検討を続けてきましたわれわれの前に、学生の存在をより大きく示して大学図書館としての教育的機能を問いかけてきた学生紛争のその意義は大きいものと思います。

最後に医学教育活動の一環として、今回慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館において「医学教育文献速報」を発行されたことに敬意を表して筆をおきます。

〈引用文献〉

- 1) 吉岡博人：昭和44年度入学式告辞 東京女子医科大学ニュース8号
- 2) 田中久文：医学図書館と他の分野の図書館 医学図書館 15 179~186 1968
- 3) 中村忠一：大学紛争の中から——解決への提言，昭和44 東洋経済新報社
- 4) 医学・医学教育審議会へ寄せられた全国大学へのアンケートの結果集計 医学と医療 2 30~69 1968
- 5) 吉本瑞応：医学生に対する文献探索指導 医学図書館 13 275~277 1966

〈参考文献〉

- 1) 松尾恒雄：薬学文献学教育の意義と問題点 薬学図書館 12 1~6 1967
- 2) 第39次日本医学図書館協会総会 承合事項：図書を選定委員会の構成メンバーについて 2~15 1968
- 3) 第1回日米大学図書館会議報告論文集 第1部 1969
- 4) 吉川文雄：医学進学課程についてのモノローグ 医学のあゆみ 64 381~385 1968
- 5) サナザロ，P. J.：医学教育の今後の課題 医学と医療 2 44~50 1968
- 6) 高橋 應：医学教育改善のための試論1 医学と医療 2 55~61 1968
- 7) Shera, Jesse H.：Of Librarianship, documentation and information science, UNESCO Bull Libr. 22 58~65 1968
- 8) 水野 肇：医学部一日本の医師づくり 1969 三省堂

*

*

*